

## 〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる造形科授業 抽象を通して子どもの美しさの認識を更新する取り組み

芦田 桃子

### 1 カリキュラム連動による学びの越境

今年度は、特に他教科との連動性を意識し、学びの越境を意識した。教科の特性を生かしながらも、教科の枠で学びが分断されないように、特にその中間に目を向け、どちらの領域にも重なり合う部分にある学びに価値を見出すことを目指した。曖昧さを曖昧なまま扱うことは、不確かな抽象を楽しむこれまでの授業づくりの延長線上にあると言える。「造形授業なのに、歌って輪唱をする」、「詩の朗読なのに、造形室の机の上に立って読む」といった活動は、授業の本筋にとっては些細な一場面に過ぎないが、普段の当たり前の中にある思い込みが、決して「～すべき、～してはならない」ではなかったことに気づくために、そして枠に縛られない思考を生み出すためには思った以上に重要なことかもしれない。

### 2 授業実践①「詩と版画」～重なりやくり返しを味わって～（第6学年）

#### （1）題材について

彫り進み版画は、これまでに経験した紙版画や一版刷り木版画とは工程が違い、色や模様の表れ方が大きく異なることに特徴がある。多くの表現ではタブー視されがちな「色が重なること」が意図的に行われる制作過程は、児童にとって戸惑いや不安が生じる場面であると言える。予想と異なる色味になったり、既知の色名では表現しにくい、混濁した色になったりする。果たしてこれは「きれい」なのか？と自問する瞬間が生まれる題材であるところに、〈他者〉が存在し、美の認識の更新が期待できると考えた。また、版がずれたり、インクがかすれたりすることも必ず生じる。しかしここでも、ずれたりかすれたりさせないことが版画のよさや魅力ではない。多少のずれやかすれがよさを生むこともあるし、人間の手による不完全さがむしろよさとして美しく見えることが版画を通して出合う「新しい美しさ」の一つだと考える。

【彫り進み版画の〈他者〉性】

「重なり」「濁り」「かすれ」「ずれ」



自分の認識外にある美しさ気づく  
自分の思い通りにはならないものが受容できる

→よさや美しさの認識の更新

〈他者〉を楽しむ

一方で詩は、受け取り側の感性や経験によってさまざまな鑑賞の視点が生まれる、

抽象度の高い作品である。彫り進み版画の中で「重なり」「濁り」「かすれ」「ずれ」が肯定的に繰り返されることで生まれる作品の抽象度との類似性や親和性がある。

## （２）〈他者〉と他領域との連動性に関わる提案

言語による内面世界の表現を、造形表現と行き来しながら融合させることで国語科内だけでは扱いきれない表現の質を味わうことを目指した。国語と造形の間にある、同じ表現の領域でありながら言語・非言語の両者に漂う価値を大切にすることができるか。笹本（2007）は次のように述べている。

言葉のテキストに基づく画像化の作業は、単純な逐語訳のようなものではない。創られる画像は原テキストと一対一対応するものではなく、そこには原作とは重ならないパート・側面が必ず存在する。本質的にはこれは、言葉がもの事を概念的一般的に捉えて表すものであるのに対し、絵は絶えず具体的個別的なものに向かうという、両者の表現メディアとしての機能の違いに由来する。絵による具体的表現は、言葉が概括的に表す事柄からはみ出した色々な要素を含まざるを得ないのである。

言葉が表す事柄からはみ出す要素が版画の表現の中にどのように表されるか。その過程は、子どもに委ねるだけでなく指導の手立てを必要とする。授業では、先人の作品鑑賞を通して捉えたり、個々人のイメージをつくりだす過程における対話を行ったりする方法をとった。

## （３）単元計画（全１４時間）※省略

## （４）授業の展開（前時までの活動）

### ①版画技法の理解

### ②詩の選択と群読

群読を中心として感覚的な理解や愛着を促した。授業の中でくり返し声に出して自己表現させることで詩の印象を自分の中につくりだし、自分にとっての意味や価値を見出すことにつながるようにした。国語の授業で詩を扱う形の連携ではなく、造形室で、台の上に立って読むなど言語以外の演出を含めた味わい方を取り入れることで詩との様々な角度からの出会いを促した。先に述べたように教科の枠を取り払い、言語と非言語の表現を行き来することにもつながっている。

## 【児童のヒロガルシートより】

○詩を読むときに感情を入れて読むなど、詩に対する意識も変わった

○初めは詩にあんまり思い入れがなかったけど読んで作品をつくることで自分なりのすてきなストーリーを作ってよい作品になった。

○なんとなく「てがみ」という詩を選んだ。でも途中から、この詩だからこの版画が作れるんだと思うようになった。

これらの記述からは、詩との出会いや群読による出会い方が詩のよさの発見や再認

識につながった児童がいたことを示している。このことは、他教科との連動を図る際に相手領域を単なる道具として「利用」するのではなく、国語領域の詩にとっても学びの深まりがあることを目指したことへの成果であると言える。

### ③詩から絵へつなげる

詩を選んだ後に構図を考える際の手立てとして、教師の価値観やイメージを示唆しないよう注意しながら、児童の詩のとらえを深めるために視点を与えたり、彫り進み版画として成立する線や面の模様や面積の適切さなどについて必要に応じた個別指導を行ったりした。抽象化に関わっては、「詩に出てくるものをそのまま表す方法もあるが、そのまま表さない方法もある」ということをくり返し伝えた。

#### 【児童のアイデアスケッチより】

「立ち止って」（星野富弘）を選んだ児童は、初回のアイデアスケッチから具体的な記述ややりとりを通して作品の構図が大きく変化した。



初めは、立ち止まっている人物の後ろ姿がメインの構図だったが、立ち止まって見る対象である「美しいもの」は何だろう、何を見ているんだろうね、と問いかけたことで視点が「他人」から「自分」になり、「ずうっと見ていていい」と思える美しい何かを表すことに、表す対象を変えている。

### ④本時の目標と授業の実際

詩から生まれた版画を色や形に着目しながら鑑賞することを通して、彫り進み版画ならではの新しい表現方法のよさに気づき、新たな価値を見出すことができる。

#### ○詩から生まれた版画を鑑賞して、（よさ）や（新しさ）を発見しよう。

昨年度の児童作品を鑑賞する中で、描かれたモチーフから作者の意図を想像したり、混ざり合った複雑な色合いについて着目したりする発言があった。そして、「浮いているような感じが出ている」という児童の発言から、それが版のずれによって生じていることにつなげ、意図的ではなかったとしても、彫り進み版画の特徴である「ずれ」「ぼやけ」「はみ出し」「よごれ」が作品のよさに変わっていると言える部分はないか、自分の作品の中にも見つけていくよう展開した。

### ⑤児童作品から価値を見取る（詩「立ち止って」（星野富弘）から生まれた児童作品）

#### 【作品A「立ち止って」～ひとりだけの世界～】

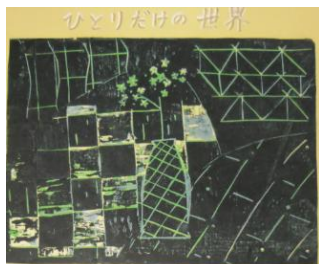
○「立ち止って」は、自分の世界のことだと思ったから、少しのこどく感をあらわしながら、うつくしいものがあることを表した。（児童A）

### 【作品 B「立ち止って」～不思議～】

○一番最初に考えていたのとはだいぶ変わったけど、もっとよくなった気がする。もう少しよみを付け足したい。あまり何が言いたいのか分からなくなった。(児童 B)

### 【作品 C「立ち止って」～ふり返って見ると～】

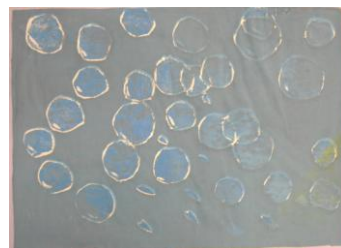
○自分が今まで見た景色がお兄ちゃんがふいてくれたシャボン玉、桜といっしょにふいてとてもきれいだったのを覚えています。なのでこれにしました。(児童 C)



作品 A



作品 B



作品 C

○ふつうの版画では、削り残しや刷りミスが悪いと思っていたけれど、今回はそのミスや版のズレから出る美しさやよさがあつた。汚れがついてもキレイだと思えた。詩とのデュエットがあつて同じ詩でもちがう画でとても良いなと思った。(児童 D)

授業後の「ヒロガル」の記述(例：児童 D)には美の更新と学びの越境が見取れる。なお、前掲作品及び他の作品に関する見取りの詳細は、「学校教育」(2025, No1276 春号、「授業研究」芦田)に述べる。

## 3 授業実践②「思い出の形」～ひびき合う表し方～(第2学年)

### (1) 題材について

本題材で扱う型紙版画は、繰り抜いた型紙の上から絵の具を付けたローラーやスポンジでなぞることで形が色となって浮かび上がることに驚きや楽しさがある表現活動である。また、型紙を用いることで、同じ形を簡単にくり返し表出させることができることにも特徴がある。スタンプングやこすり出しなどこれまでのものの形を写し出す活動との違いは、自分で型紙の形を考えてつくることができる点にある。また、紙版画、木版画につながる、版に写す活動としての系統性も重視される題材である。

### (2) 〈他者〉と他領域との連動性に関わる提案

#### 【型紙版画の〈他者〉性】

「くり返し」「重なり」「ならべ方」



好きな色や形、ならべ方を見つけ楽しむ  
抽象的な色や形、ならべ方のよさを味わい、楽しむ  
→よさや美しさの認識の更新  
〈他者〉を楽しむ

型紙版画で版に写す際の表現として、「くり返し」「重なり」「ならべ方」が重要な視点となる。特に「重なり」は、配色や配置によって「よさや美しさ」が損なわれる可

また、低学年では、表現や鑑賞の活動を通して、自分の好きなものや大切にしたいこと、人や自然との関わりの中で生まれた感情を見つめ直し、再発見、自己認識することを重視する。本題材では、「思い出の形」とテーマ設定することで、出来事とともに自分の感情に目を向けさせ、自己更新につながる気づきを促すようにする。これは、〈他者〉としての自分の視点である。

型紙は、児童がはさみで切ってつくり、ローラーやスポンジで上からなぞるため複雑で細かい形は適さない。なるべくシンプルな形かつ自分の思いが表せる形を考えることが本題材の大事なポイントでもある。形のない「思い」を表す方法を見つけたり、その過程を経験したりすることが【自分にとっての意味や価値を見つける】【自己受容】【他者尊重】につながる重要な過程である。その形は具体的な形になるとしても、それは抽象から生まれた象徴であり、例えば店に並ぶミカンと、ある子が思い出とともにシンボル化したミカンは異なるものであると言える。

○形や色がひびき合うようにはんをうつそう。

本時では、音楽で取り組んだ「鐘の音」を輪唱し、「音が違うのにきれい＝ひびき合う」なことに着目し、輪唱での声の「重なり」「くり返し」「ずらし」（ならべ方）が型紙版面にも共通していることに気づかせた。そして、「色や形がちがうのにきれい＝ひびき合う」ができるか問いかけ、鑑賞活動で見てきたように、色や向き、位置などが

「けんかせず」,「いいな, きれいだな」と思うように表してみることをめあてにつなげ, 表現活動に移った。

(6) 児童の型紙版画作品から価値を見取る

①「ほう石のあつまり」 ②「畑の中でそだったよ」 ③「月の夜に見たセミのふか」



④「えびの赤ちゃんが生まれたよ」



①の児童は,「好きなものの思い出, きれいな思い出, うれしい思い出」として,「香川へ行って, 宝石探しをしました。すると, いろんな形の石が出てきて, いろんな色の宝石が出てきた。」という思い出を表した。たくさんのきれいな色や形の思い出が, くり返しや重なりを使った型紙版画の表現にマッチし, 重ね方にもひびき合いを意識した工夫がみられる。②の児童は,「楽しい思い出, がんばった思い出」

として,「父さんと畑に行って野菜を収穫してがんばった。父さんを思い出したとき, 畑だって思ったから」と思い出の理由を述べている。畑の中の生き生きとした野菜が形の動きに表れている。そして, 表したい思い出の中に父親の姿を思い浮かべたことに低学年らしい感性と, 自分の内面世界との対話をしっかりしたことが見取れる。③の児童は,「感動した思い出」として,「セミのふ化を初めて見た, 自分の好きな虫のふ化を見れてすごく感動してこれからいろんな虫のふ化を見ようと思えた」と振り返っている。実際に見たセミは1匹だが, くり返して並べて驚きや感動を表す方法は④の作品とも通じる。授業では, そのまま事実として1匹表す以外に思いを表現する方法の一つだとして紹介し, 友だちの作品から新しいよさにつながるようにした。これらは,「思い出」を通して, 唯一無二の自分を表現することと, 色や形のひびき合いという調和を意識した美の認識更新という価値があった。一方で, くり返しや重なりを使わなかった作品や, 材料や用具の使用の難しさがあった児童の姿などが課題として見られた。作品鑑賞での〈他者〉を楽しむ姿も価値づけ, 提案する余地が残る。次の新しい視点とともに整理していきたい。なお, 授業実践②の詳細は,「学校教育」(2025,No.1279, 冬号,「実践ノート」, 芦田)に述べる。

【引用】笹本純(2007),『絵で読む宮沢賢治展—賢治と絵本原画の世界』, 下関美術館他